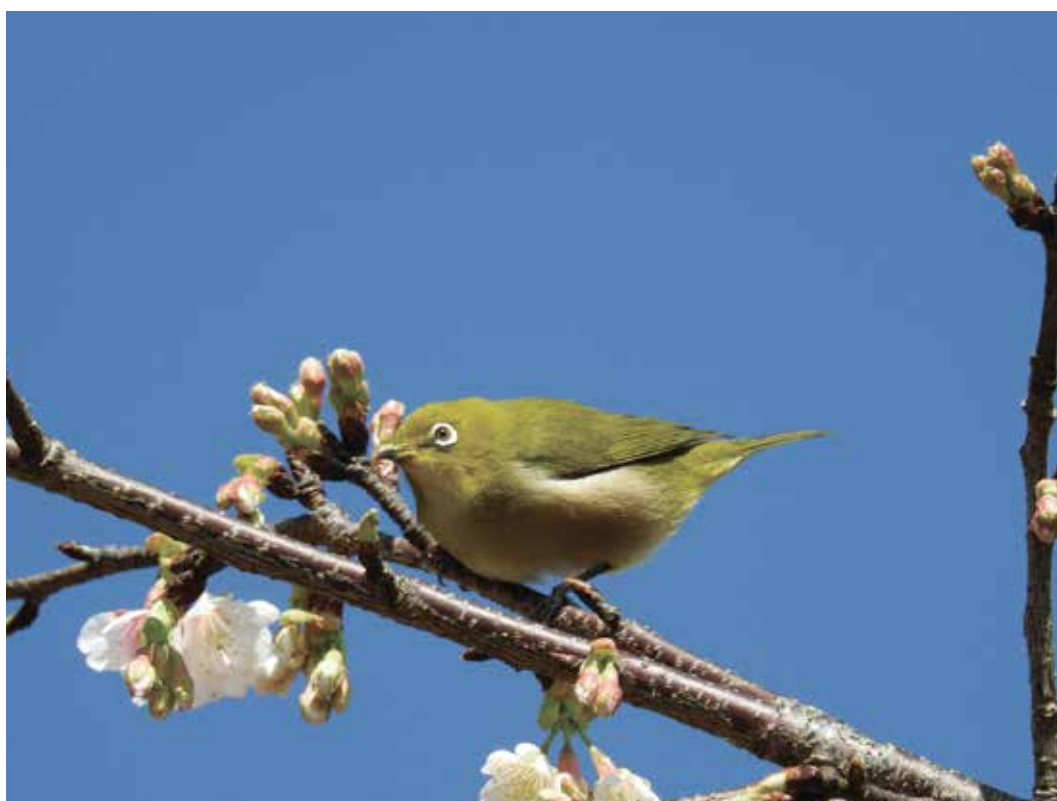

寄 稿



寄稿

空手道とわたくし ～セカンドライフとしての私の空手道～

鹿児島厚生連病院名誉院長 窪菌 修

皆さん、まず初めに私の自己紹介をいたします。私は昭和17年(1942年)生まれの77歳になります。以前は鹿児島市の鹿児島厚生連病院に約36年間勤めていました。昨年7月、院長の高尾尊身先生との縁で、水曜・木曜の2日間非常勤医師として内科を担当させていただいております。勤めておおよそ1年になりますが、院長の高尾尊身先生、理事長の田上寛容先生をはじめ職員の方々の温かい人柄のおかげで楽しく働かせていただいております。

今回、院内機関紙”飛魚”への寄稿を依頼されました。医学的なことはドクター、スタッフの方々がたくさん寄稿されていますので、私は自分のセカンドライフとして位置づけている空手道について若干お話ししたいと思います。

私は鹿児島大学に昭和37年(1962年)に入学し、すぐに空手道部に入部いたしました。新入部員は今では考えられないくらいの多人数で約70名でした。練習は今の学生には想像できないほど激しく厳しいものであり、裸足でのランニングや腕立て、腹筋、うさぎ跳びなど、吐き気を催すほど毎日鍛えられました。しかし練習を終えたのちの、野外で正座をして黙想する時の満足感と爽快感は格別のものでした。

夏合宿は戦後20年(太平洋戦争後)足らずの時期でしたので、皆学生は金がなく、学生一人一人布団を大学構内の中講堂に持ち寄っての合宿で



した。合宿中の中日(6日目)、先輩の発案もあり、夜中11時ごろ、部員一同たたき起こして下駄ばきのまま道着のみという服装で、約40kmあまりの伊集院町の妙円寺まわりを徹夜で敢行しました。私たちが幹部の時であり、部員には全員金も持たせず、身に寸鉄も帯びていませんでしたので、伊集院からの帰りは、極端な寝不足と疲労で 敗残兵の様な有様で大学に帰り着きましたが、今では懐かしい思い出であり一時(いつとき)は鹿児島大学空手道部の主要な年中行事になっていました。

大学生活も1年、2年が過ぎ3年となり、部員も9人ほどに減っていたものの、秋、師範米沢先生の昇段審査を受け、待望の黒帯を戴いた時の喜びは筆舌に尽くしがたいものがありました。

そして、直ちに翌年春、米沢師範のお許しを得て、同期の現在北九州市で開業している植田君と共に医学部に空手道部を創設し現在に至っています。現在、医学部空手道部も創部55年を迎え、OBも100人を超えそれぞれの分野で医師として活躍しています。

私も昭和43年(1968年)に卒業し、その後も練習を継続して行い、医学部空手道部の学生の指導や大会医師として、多くの試合の大会運営にあたりました。その後、昭和50・51年に大学病院医局の命令で、沖縄県那覇市の病院に勤務することになりました。沖縄(琉球)は空手道発祥の地、空手道のメッカであります。



昭和39年当時の夏合宿

空手道は沖縄では、昔、手(テイ)と称し、琉球古来の武術と琉球が中国大陸に近いこともあり往来も頻繁であったことから中国古来の武術と融合し、沖縄独特の武術として発展したものであると思われま。また、1609年薩摩藩が琉球に侵攻し、事実上琉球王朝は薩摩藩(島津家)の支配下に置かれることとなり琉球の武士階級は武装解除され、刀を帯びることが許されなくなりました。そこで琉球の人々は、空手道(空テイ)はもちろんとしてヌンチャク・サイ・トンファ・鎌・權(エイク)・棒などの古武道を密かに発展させ、今では沖縄古武道として世界に拡がっています。まさに空手道と古武道は沖縄の文化であります。

私は直ちに、沖縄小林流の創設者知花朝信先生の高弟で沖縄小林館協会会長仲里周五郎先生の門下生となりました。私はここで1年間、本場沖縄空手道の考え方、身体の鍛え方、型を気が遠くなるほど繰り返すことによって、身体が練られ即実践に使える事、そしてサイ・ヌンチャク・トンファ・鎌・權(エイク)・棒などの古武道など、実に多くのことを先生より学びました。

先生と親しく教えを戴き、神業に近い空手の技と求道者としての人格の高潔さに傾倒し、密かに一生先生についていこうと決心しました。こうして1年間先生の教えを受けながら、空手道のすばらしさ・奥深さを知り、一生空手道を続け、沖縄の伝統空手道を今の若い人、特に医学部空手道に伝えていこうと心に強く誓いました。

鹿児島に帰ってからは、自分なりにコツコツ練習を続け、学生の指導を最低週1回は行い現在に至っています。平成17年(2005年)、師範仲里周五郎、米澤次男両先生より、空手道八段の免状と師範の証書を授与されました。私の60年近くになる空手道修練で

分かったことは、人はそれぞれ体格の違い、運動神経の差はあれ、継続が第一であり、練って、練って体に染み込ませることが大事であります。そして、その内容は他の武道スポーツも同じかと思いますが、足腰の鍛錬など基礎体力が第一であり、同時に軸がぶれないこと、首筋・肩の力を抜くことが肝要と思います。しかし、これもたゆまない修練を積まないと難しいことと思われま。



鹿児島大学空手部OB



サイの構え



鎌



棒

ここに、空手道の歴史上、高名な先生方の言葉で私が感銘を受けた言葉を記します。

**武は暴を禁じ、兵を収め、人を保ち、功を定め、民を安んじ、
衆を和し、財を豊かにす、とこれ武の七徳なり。**

松村 宗棍

すべては自然であり変化である。構えは心の中であって外にはない。

本部 朝基

生半可は自滅である。仁、義、礼、智、信の五常をわきまえよ。

松茂良 興作

**空手道は礼に始まり、礼に終わる事を忘れるな。
空手に先手なし。**

船越 義珍

人に打たれず、人を打たず、事なきを基とするなり。

宮城 長順

**長年修行して、体得した空手道の技が、生涯を通じて無駄になれば、
空手修行の目的が達せられたと心得よ。**

喜屋武 朝徳

これらの言葉は古い時代の言葉ですが、今でも私たちの人生に資することが多い言葉と思っています。

さて、このくらいで私と空手道についてのお話は終わりにしたいと思います。

最後に、縁あって私も当センターに勤めていますが、田上寛容先生、高尾尊身先生を中心に、職員一同お互い協力し合ってより良い医療に努めていきたいと思っています。

なんといっても最後は人です！



小児科のあゆみ

鹿児島大学医歯学総合研究科 小児科学分野 教授 河野 嘉文

種子島医療センター設立50周年を心よりお祝い申し上げます。田上容正会長はじめ、これまで貴地域で医療の提供に貢献してこられた病院関係各位のご努力に敬意を表したいと存じます。

田上病院(当時)に小児科が開設され常勤医が勤務し始めたのが、1993年からと鹿児島大学小児科で記録しております。私は2002年9月1日付けで鹿児島大学に着任いたしました。2か月に1回の頻度で血液腫瘍外来を開始させていただいたのが2005年からだと思います。当時の田上容正理事長、田上容祥院長から声をかけていただき、何人かの対象患者さんが種子島におられたので、少しでも役に立てればとの思いでした。

2000年代前半は全国的に小児救急医療が社会問題としてクローズアップされ、少ない人材でへき地・離島の小児医療をどのように展開できるか苦慮していた時期でした。私はちょうど特定非営利活動法人こども医療ネットワークの設立準備をしており、実際に種子島で診療させていただく機会を得たことは、時宜にかなった経験になったと思います。同法人の設立から昨年まで、田上容正会長には監事を務めていただくとともに活動を支援していただきました。現在は寛容理事長に監事を引き継いでいただいております。

振り返ってみますと、着任して早々根路銘安仁先生(現医学部保健学科教授)が一人で担当していた小児科を訪問し、地域のニーズに応えるためには複数名の小児科医が必要であることを確認しました。そこで、翌年入局してくれた8人の中から、一人だけ卒後3年目であった児玉祐一現医局長に行ってもらい小児科医2人体制を開始しました。その後の新医師臨床研修制度の導入による2年間入局者なしの厳しい時期も含め、医局員の協力で2人体制を維持することができました。その後、小児を取り巻く社会情勢は変化し、全国的な小児医療のパラダイムシフトの中で、感染症で調子が悪くなった小児のみを病院で待つ時代の終焉を感じています。

実際に、種子島1市2町の小児人口(15歳未満)は、平成15年の5,481人から平成31年には3,567人(65%)に減少しております。予防接種体制の充実もあり、発熱や下痢等による小児科受診者の減少と入院患者の激減が確認されているのは鹿児島だけではありません。この度の新型コロナウイルス禍においてその傾向はさらに顕著になり、国内で発症者が出てからクリニックの受診者数をもっとも減少した診療科は小児科と言われております。小児医療は不要不急なのか、という自虐的な意見が全国の小児科医に広まっている事態です。

しかしながら、最近でも島内で出産ができなくなるという大きな問題が発生したように、世界一の超高齢化社会の中で、住民の方々や自治体関係者にとって、安心して子どもを生み育てられる環境整備は自治体存続の鍵になっております。幸い、島内各自治体のご尽力により、種子島産婦人科医院の開設につながり、高尾尊身病院長はじめ種子島医療センターの経営に関わる方々のご理解で、新生児から高校生までの小児医療の提供が継続できているように思います。

2017年からは、地元出身の岩元二郎先生に部長として着任していただき、未整備であった療育分野の充実と、小児保健業務の拡大を図りながら、同時に鹿児島大学から派遣する若手小児科医の教育にご尽力いただいております。

田上容正会長はじめ関係の方々はもちろんのこと、最初の小児科常勤医である島子敦史医師から、江藤豪、吉留幸一、武明子、根路銘安仁の歴代各医師の1人医長としての努力が礎となり、今日の幅広い小児医療・保健活動につながっていると思います。改めて、すべての関係者に御礼申し上げます。

種子島医療センター設立50周年を記念して

鹿児島大学医学部保健学科外科分野 教授 新地 洋之

このたびは種子島医療センター設立50周年を迎えられたとの事、心よりお慶び申し上げます。昭和44年開業されて現在に至るまでの種子島医療センターの歴史に感銘を受けるとともに、田上容正会長の長年のたゆまぬご努力と強靱なメンタル力に深く敬意を表します。現在、種子島医療センターは田上寛容理事長、高尾尊身病院長のもとさらなる進化を遂げており、令和時代ますます発展されるものと確信しております。

今年上梓された田上容正会長の「折々の言の葉」と高尾尊身病院長の「しあわせの医療を求めて」を拝読させて頂きました。その中で、田上会長のお好きな言葉「積み重ね、積み重ねた上にも又積み重ね」と50年間一度たりとも往診を求めてきた患者さんを断ったことがないという文面を拝見して、50年間たゆまぬ発展を続けて来られた真髓をみたような気がしました。また、高尾病院長の病院を良くする六つの要因として、①変化、②危機感、③謙虚、④折衷、⑤勤勉、⑥挑戦が必要であるという文面に、これこそが種子島医療センターが現在さらなる進化を遂げている最大の要因であると痛感しました。

ネットで「長寿企業に共通する特徴」をリサーチしてみたところ、以下の4つが挙げられていました。

1. 時代の変化に適応するために自らを変革させている
2. 人を尊重し、人の能力を十分に生かすような経営を行っている
3. 長期的な視点のもと、経営が行われている
4. 社会の中での存在意義を意識し、社会への貢献を行なっている

いずれも驚きの事実はないが、実行していくことは容易ではないと書かれていました。

まさに、種子島医療センターはこの4つの特徴を全て実践されており、改めてこれらを継続、継承されていることに深く感銘しております。

種子島医療センターは、鹿児島県外からの若い医療スタッフが多いのも稀有な特徴で、大きな強みだと思います。医療人材不足が急速に進行して行く離島の中で、種子島医療センターがこれからの日本の新たな希望ある離島医療のモデルとなる事を大いに期待しており、さらに今後100年を目指した医療施設になることを願っております。

モザンビークアイキャンプ

眼科 田上 純真

6月に、自身二度目のアイキャンプへ参加してきました。

関西国際空港を夜の12時に発ち、ドバイ国際空港で飛行機を乗り換え、南アフリカ共和国の首都ヨハネスブルグへ、そこからさらに乗り換えてモザンビークの首都マプトへ向かいます。一泊してからチャーターしたワゴン車で陸路を6時間、計48時間の移動でようやく目的地シャイシャイに到着。初日に集められた300人の現地の(ほぼ失明している)患者を診察、翌日から3日間で合計230眼の水晶体摘出術を行いました。個人的にはスキルもまだまだですが、アフリカという異国の地での限られた設備や資源を使っての手術は、普段の診療で行なっているそれよりも何十倍、何百倍もの経験となります。また手術によって光を取り戻すことのできたアフリカ人の現地の方々と術後手を取り合い、抱擁を交わして喜びを分かちあうかけがえのない時間を過ごし、医とは何かということや、私が医者として生きることを意味を教えてくださいました。

帰路の車窓から見えるモザンビークのどこまでも続く地平線と流れていく赤土の大地の情景が、今でもときどき愛おしくなるくらいに胸に蘇ります。心の深奥で私はまた彼処へ行きたいと思っているようだ。

日本という国は世界一豊かで清潔で知的で、私の人生は恐ろしいほどに恵まれすぎています。

これからもありふれた日常の尊さをかみしめながら、この経験を日々の診療に生かしていきたいと思えます。



がん化学療法看護認定看護師の活動

外来化学療法室 がん化学療法看護認定看護師 山之内 信

認定看護師とは、看護師として5年以上の実務経験を持ち、日本看護協会が定める615時間以上の認定看護師教育を修め、認定審査に合格することで取得できる資格です。資格取得後はその専門性を活かし、認定看護師の3つの役割である「実践・指導・相談」を果たして、看護の質の向上に努めていくことが求められます。認定看護分野には現在21種類の様々な分野があり、私は「がん化学療法看護分野」の資格を取得しました。がん化学療法とは、抗がん剤治療のことを指します。私は主に外来化学療法室で勤務しています。業務内容は抗がん剤を投与することだけでなく、治療で生じる副作用や不安をできるだけ軽減し、患者さんがその人らしい生活を送りながら治療を継続できるようにサポートします。

昨年度は病院での活動だけでなく、様々な場所で「がんの予防」や「がん教育」、「実践活動報告」などの話しをさせていただきました。患者さんに抗がん剤を投与するだけでなく、島民の皆様には「がん」という病気を正しく知ってもらい、予防してもらおう。これも「がん化学療法看護認定看護師の役目」だと思っています。

今後も種子島のがん予防、がん治療のために精一杯活動していきたいと思えます。

【昨年度の活動】

- ・院内化学療法勉強会講師「抗がん剤による末梢神経障害看護ケア3つのポイント」
2019/4/30種子島医療センター
- ・第13回鹿児島がん診療セミナー一般演題「当院における外来化学療法室の現状と今後の課題」2019/6/28
城山観光ホテル
- ・がん教育講師「がんを学ぼう あなたと大切な人の命のために」2019/7/17古田小学校
- ・第22回がん看護に携わる認定看護師のためのフォローアップ研修会座長「いま知りたいがんゲノム医療」2019/9/14 久留米大学認定看護師教育センター
- ・鹿児島県食生活改善推進員連絡協議会中央研修会講話「がんの基礎知識と予防・早期発見」
2019/9/19南種子町中央公民館
- ・がん化学療法講演会in種子島 座長 2019/10/30 種子島医療センター
- ・院内勉強会講師「なぜ抗がん剤を受ける患者にB型肝炎検査を徹底するのか」2019/11/6
種子島医療センター
- ・第34回日本がん看護学会学術集会演題登録「離島で経口抗がん剤治療を受ける高齢患者の
外来看護へのニーズ」2020/2/22 東京国際フォーラム

プロとして新たなスタートを切って

広報企画課 姫野 ナル(プロテニスプレイヤー)

種子島医療センターの広報企画課に所属させていただき、1年が経ちました。2020年1月1日からは、プロテニスプレイヤーとして活動させていただいており、また、新たな気持ちで今年目標である"世界ランキング獲得"を目指し、日々トレーニングや練習に励んでいます。

プロ第2戦目となる今年2月には、世界のトッププレイヤーが数多く出場する"WTA"の舞台に初めて立つことができました。予選敗退と残念な結果でしたが、早い段階でこの経験を積むことができたのは幸運で、多くのものを得ることができました。

その後もツアーを回って…と、予定を組んでおりましたが、新型コロナウイルスの影響で試合は全て中止になってしまいました。現時点で、国際大会は7月末まで、国内大会は7月中頃まで、開催中止が決まっております。

現在は、練習拠点である大阪市内のテニスクラブが封鎖されているため、練習もできません。そこで、練習ができるようになるまでの間は、トレーニング期間にしようと気持ちを切り替え、食事制限を含めた大幅な肉体改造を行っています。

試合再開後、ベストパフォーマンスを出せるように、それまでは今できることを取り組んでいきます。そして、医療センターの一員としての自覚を持って行動していきます。

最後に1日も早く日常が戻ることを祈っております。



研修を終えて(研修医)

福岡大学病院卒後臨床研修センター 研修医 2年 吉村 郁弘

2019年9月の1ヶ月間、短い期間でしたが、多くの感動経験をさせていただきました。現在研修中の大学病院では、急患対応に始まり、外来、病棟入院患者管理と、治療方針を決定する機会はありません。しかし、医療センターでは、もちろん指導医の監督の元ですが、目の前の初診の患者さんに診断をつけ、治療方針を決定し、患者家族へ説明後、入院管理、退院後の立案、退院までを一任して頂くという、大変貴重な経験をさせていただきました。医療センターは、CT、MRIといった設備は整っており、院外緊急読影依頼も可能で、また、各科の先生方が週に数回非常勤医師として外来診療に来られるので、専門性の高い病態に対してもコンサルトさせて頂く事ができ、離島医療とは言うものの、想像していたよりも医療の制限を感じる事なく診療する事が可能でした。一方で、やはり高度な加療には制限があり、本土へフェリーやヘリにて搬送するといった症例も経験しました。この経験は、もちろん初めてのことで戸惑うことがたくさんありましたが、診療に行き詰まった際は、朝のカンファレンスで指導医・上級医にアドバイスをいただいたり、勝手がわからないことは病院スタッフの方にご相談させて頂いたり、周囲に恵まれた環境で研修する事が出来ました。初期研修終了後に一人で患者を診ていくにあたって、間違いなく今回の経験は今後の糧になるだろうと実感しております。

そのほかにも、皮膚科の猿渡先生の屋久島にある栗生診療所への診療に帯同させていただいたり、内科の田上先生の往診に帯同させて頂いたり、普段の研修では経験することのない体験を沢山させていただきました。

臨床研修以外では、週末は種子島の大自然・食に触れ、種子島宇宙センターや、鉄砲館、広田遺跡といった施設見学から、サーフィン、シュノーケル、ゴルフ、ボルダリングといったレジャーまで、種子島を十二分に満喫する事ができました。また、機会に恵まれ、H2-Bロケットの打ち上げも見学する事ができました。

医療センターのスタッフの方々、そして種子島の方々、暖かく臨床研修を受け入れてくださり本当にありがとうございました。この体験は、一生の宝になると思います。

済生会松山病院 臨床研修センター 初期研修医2年目 吉田 暉

種子島医療センターでの離島研修が決まった際に種子島を訪れることができる喜びと同時に自己完結が必要とされる病院で問題なく研修ができるか不安も持ち合わせていました。勤務日の前々日に種子島を訪れたところ、当日におこなわれていたバーベキューに誘っていただきスムーズに施設の方々と接することができました。翌日には別病院から来た同期と種子島観光を行い、種子島の魅力を堪能することができました。

研修が始まった初日には救急車対応をさっそくさせて頂き、ICU管理を経験させていただきました。今までの研修では主治医の下で、時に任されることはありながらも自身が中心となって治療方針や患者家族への説明等は日常的に行う事はありませんでした。しかし、種子島医療センターでは主治医としてすべてを行う事を任せていただきました。最初はなかなか自信を持てず不安になりながらの研修でしたが、方針に困った際には相談に乗って頂ける上級医の方々ののおかげで少しずつ自信を持つことができました。

また、何よりも同時期に研修となった同期達のおかげで異なる環境でも楽しみながら研修を行う事ができました。各々の症例で困った際には互いに調べて治療方針に関して日々ディスカッションを行う事ができました。この日々のおかげで改めて自己研鑽に励もうという刺激を受けることができました。さらに仕事以外にも休日にはみんなで宇宙センターに行ったり、ご飯を食べたりと楽しむことができました。ただ一つロケット打ち上げを見ることができなかったことは心残りです。

2週間という短い間で充実した研修を行う事ができたのは、研修のために恵まれた環境を準備して頂いた種子島医療センターの方々ののおかげです。飯田さんをはじめ身の回りのお世話をしていただいた事務の方々、迷惑をかけながらも優しく接して下さったコメディカルスタッフの方々、日々指導していただいた上記の方々のおかげで貴重な離島研修を行う事ができました。また、離島研修を行う事で得難い友人たちとも知り合うことができました。本当にありがとうございました。

北海道大学病院研修医 川崎 祐寛

北海道大学病院研修プログラム研修医2年目の川崎と申します。北海道大学では鹿児島大学と協力し、それぞれの土地で地域研修を行えるプログラムがあります。私もこのプログラムに参加し、今回、2019年7月の1か月間、種子島医療センターで研修をさせていただきました。

種子島医療センターでの研修は、病棟業務が主でした。ここでは主治医として、患者の治療方針を決定し、治療効果判定、退院判断まで自分が行います。今までの研修では上級医のもとで学ばせていただくような研修が多かったです。主治医になることでより責任を感じながら診療することができ、勉強になりました。責任問題などが囁かれる昨今で、研修医の私にも最前線で診療をさせていただいた先生方に感謝申し上げます。

また、救急外来でのトリアージにも参加しました。色々な疾患が来る中、的確に判断を下すことの難しさを学びました。そんな症例の中にはマムシ咬傷やハチ刺傷、磯で四肢を受傷するなど島らしい症例もありました。そんな中で印象的だった症例があります。心肺停止症例です。心肺停止症例では医師は皆に指示を出すリーダーになります。今までも心肺停止症例を見たことはありましたが、上級医の指示に従っているだけでした。初めて、自分が指示する立場になりました。とても不安でした。最終的に患者を蘇生させることはできませんでした。これから医師として生きてく中でこういった経験は何度もあると思います。患者の状態や情報、看護師の状況などを把握しなくては的確な指示は出せない事などこの経験から学ぶことが多かったです。

また、海や種子島宇宙センターなど観光へも行くことができました。とても綺麗な海で泳ぐことができ羨ましく思いました。そんな自然が豊かな種子島で人類の叡智を集結させた宇宙開発の最先端を見学でき、感動しました。

初めは慣れない土地で不安もありましたが、皆さまが優しく支えて頂き、楽しく研修生活を送ることが出来ました。丁寧な御指導をして下さった田上先生、松本先生、田淵先生、その他医療従事者のみなさま有り難うございました。また、このような研修プログラムを作成、支援して下さった北海道大学と鹿児島大学の関係者、高尾院長をはじめとする種子島医療センター関係者様、皆様方に感謝申し上げます。2年間という短い初期臨床研修期間の中、言葉や気候、文化、疾患の地域差のある鹿児島・種子島で研修をできたことは一生の宝であると感じます。

鹿児島大学病院 初期臨床研修医 船津 諒

私は鹿児島出身なのですが種子島は一度も訪ねたことがなく、今回が初めての来訪になりました。第一印象としては、おいしいご飯と青い海が印象に残っています。また、理事長から教えていただいたサーフィンに大いに魅了され、文字通り晴れの日も雨の日も海に繰り出す研修生活でもありました。

さて種子島来訪の真の目的である臨床研修ですが、いくつかの点で大学病院との違いを感じました。まず一つ目ですが、年齢です。患者さんの年齢が非常に高いため腎機能低下が進行している人が多い事、ADL低下にともない体重が落ちている方が多い事より、薬の用量には非常に気を使いました。二つ目に、家族を含めた患者さん、病院間の関係性です。患者さんが病院、医師・看護師を含めたスタッフを信用し、人生の一部をゆだねていると感じさせる場面に会うシーンが何度かありました。この点はかかりつけ医の役割を持たない大学病院とは特に異なる点かなと感じます。また最後ですが、スタッフ間の連携の良さ、仲の良さは今まで見たどの病院よりも優れているような印象をこの一か月で受けました。このような雰囲気病院づくりを担っていただけたらいいなと切に思います。

次に研修内容についてですが、私は今まで内科として腎臓内科、消化器内科、糖尿病内分泌内科、脳血管内科をローテートしてきました。すべて3次病院で研修を行っていたため、基本ローテートしている科の疾患の事を主に勉強し、治療・マネジメントしていました。しかし、種子島医療センターに来てからは心不全増悪、活動性結核、悪性腫瘍精査、不明熱、脱水、高NH₃血症など多岐にわたる疾患に遭遇し治療する経験を積むことが出来ました。そのように様々な科をまたいだ治療を行う中で今までそれぞれの科で習得してきたアセスメント、治療、診察技術が横のつながりを持ち、非常に有意義であったように感じます。特に体液volume管理についてはかなり臨床家としての幅が広がったように感じます。

この1か月間本当にありがとうございました。ここで得た経験をもとに、更なる研修生活、そして3年目へステップアップし、医師として成長していきたいと考えます。本当にお世話になりました。

北海道大学 研修医2年 渡辺 祈一

1か月という短い期間でしたが、大変お世話になりました。ありがとうございました。

まず種子島医療センターにきて1番驚いたことは、種子島医療センターは自分が思っていた以上に充実した医療環境であるということでした。自分の種子島医療センターの研修前に抱いていた離島の医療のイメージは、施設や設備が充実しておらず、検査等も制限した環境下で医療を行っているのではないかと思っていました。しかし、実際は一般的な検査は行える上に、診療所や介護老人保健施設などもあり、退院後のフォローまできちんとしており、種子島に住む患者さんにとって恵まれた環境であると感じました。

また診療科が充実している点も素晴らしい点だと感じました。自分は去年、函館の市中病院の函館中央病院で1年間研修をしていましたが、そこでは、呼吸器内科や血液内科などがなく、内科が充実していない病院だったので、結核や間質性肺炎の急性増悪などの患者さんが来た場合、すぐに近くの病院に送っていました。種子島医療センターでは、常勤の先生は科が限られている場合もありますが、外来に色々な科の先生が、来て頂けるので、入院中の患者さんのコンサルトなどがすぐできる環境であり、また専門の先生にみて頂くことで、鹿児島の方に送るかどうかの判断も適切にさせていただけるのでとてもよい環境だと感じました。

研修内容としては、外来や病棟業務を主にやっていましたが、検査もしっかりと行い、鑑別診断をしっかり上げ、アセスメントをしっかりしなければならず、去年自分のいた病院ではあまり経験がなかったので、最初はなれなかったのですが、とても勉強になり、貴重な経験になりました。

また屋久島研修、宇宙センター見学、ダイビング、サーフィンなどとても良い経験ができ、毎日楽しく過ごすことが出来、あっという間の1か月でした。

1か月という短い期間でしたが、とても貴重な経験ができ、とても満足しております。本当にありがとうございました。

鹿児島大学2年目研修医 林 真生

種子島医療センターで2019年4月に約1か月間研修をさせていただきました。初日は院長の高尾先生のお話が終わったところに来月からの新しい元号の「令和」の発表があったのが印象に残っています。

研修の初めのころに理事長の田上寛容先生に外来や病棟業務を自分で好きなようにやっていいよ、といわれました。自分で好きなようにといわれても何をどうすればいいのか全く分からず、近くにいる看護師さん、クラークさんなどに助けていただいたり、教科書やインターネットでガイドラインを調べながらどうにか対応していました。また、患者さんや患者さんのご家族に病状説明やDNARの同意書をとるといったことも初めての経験でした。どういったことを話せばいいのか、この内容でいいのか、どういった話し方で話せばいいのか、など考えながら話しました。なかなかうまく説明することができず、こういう風に言えばよかった、このことを話すことを忘れていたなど反省することが多かったです。

手技もいろいろとさせていただきました。ただ手技をさせていただいただけでなくその日のうちに振り返りをし、次に同じ手技をするときに反省点を活かせるようにすることが大切と松本先生に教えていただきました。今後は先生の教えを心掛けて手技を行おうと思いました。

また、大学病院とは違い離島医療ならではの訪問診療や訪問看護、訪問リハビリも経験させていただきました。昨年研修した垂水でも思ったのですが、今後高齢化が進んでいきどんどんこういった訪問診療といったものの需要は増えていくのだろうと改めて感じました。当たり前のことですが、訪問診療でいろいろなお宅をうかがうことで一つ一つの家庭は全然違い、その一つ一つでそれぞれ違った対応をしないといけないのだと感じました。病棟でよく寛容先生がおっしゃっていましたがその人が家に帰った時、サポートする家族はいるのか、どういった家の状況なのか把握しとかないといけない、ということの大切さがわかりました。ただ病気を治して返すだけではダメだということを学びました。

以上のように種子島医療センターでは様々なことを経験させていただきました。3年目になると研修医の時と違い自分の責任で行うことが増えてくると思います。今回の研修ではそういったことの一部を経験できたと感じています。これらのことは自分が今まで研修していた大学病院では決して経験できなかったと思うので種子島医療センターで研修させていただき本当に良かったと思います。この1か月研修医は1人だけで気軽に相談できる相手などもおらず大変な面もありましたが、寛容先生をはじめとして松本先生、田淵先生、小倉先生など先生方が色々と教えてくださったのでとても勉強になりました。また、先生方以外にもこの1か月間は病院のスタッフの皆様のお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます、ありがとうございました。

種子島実習 感想

鹿児島大学 医学科 6年
川俣 有輝

私は今回の離島実習に臨む前に、鹿児島市内や他の地域で診療所、また今までは実習してこなかった離島の医療現場とどのような点があるのか、また共通点はあるのかという点について注目しようと考えました。実習の間、種子島医療センター、ひらび苑、種子島産婦人科医院、現和苑、百合砂苑、田上診療所など、様々な施設にて実習をさせていただきました。種子島医療センターには、最新の医療機器が揃い、医師も鹿児島から多く来ていたこともあって院長先生のお言葉通り「離島医療の最後の砦」であると感じました。特徴的だったと感じたのは、整形外科疾患の患者さんが多いこと、また循環器内科などの外来であるものの科専門の疾患では少なめに受診されている方もいることでした。大きな病院であるにもかかわらず、患者さんとの信頼関係も厚いことに驚きました。ひらび苑、現和苑、百合砂苑では多くの方とお話しし、種子島での介護の現状を知ることができました。子どもが種子島にはいないのでお母さんやお父さんが多いと話し、鹿児島本土でも同じような悩みを抱える方もいるのではなかると考えました。種子島産婦人科医院では1人の医師に対して年間200件近々の分娩を行うこと、搬送時間や輸血パックのことも沢山のことから先生が体力的、精神的負担は大きいのではなかると感じました。全体を通して、今回の実習が新しい経験もたくさんあることを考えさせられ、自身も医師になってからどういったことを身につければ良いのか知ることができたと感じます。最後にはお礼状を、今回の実習で世話になった方々にお礼申し上げます。この実習で得たことを活かし、医学に励みたいと思います。本当にありがとうございました。

4/8 ~ 4/18

種子島での実習を終えて

向井 聡志

4/8 ~ 4/18 の11日間種子島で実習をさせていたおいた。初日に病院長の高尾先生が、「種子島は日本の縮図として捉えることができる」とおっしゃっていて、今回の実習を通してその意味を実感することができた。

医療センターでは、島民に鹿児島市と変わらない医療を提供しようと努力している病院側と、鹿児島市の医療機関を受診したがる島民との間のギャップが印象的だったが、それでもプライドをもて診察している医師がかこよかた。

病院での実習だけでなく、福祉施設などで実習も多いことが種子島の実習の特徴だが、そのなかで、家族と離れて生活し、なかなか訪問してくれないことに寂しさを感じながらも、それを受け入れ、新しい人間関係を築いたり、リハビリに積極的に参加したりすることで、社会的、身体的に充実した生活を送っているように思えた。

最後になりましたが、今回の実習のお世話をしてくださった飯田さん、高尾先生、田上先生、猿渡先生、看護師の皆さん、理学療法士、作業療法士の皆さん、介護職員の皆さん、ありがとうございました。

離島・へき地医療実習レポート

上ノ町 優心

離島・へき地医療の実習で、この2週間、種子島医療センターには、大変お世話になりました。体験したことや、印象深かったことを書いていきたいと思います。

まず初めに院長の高尾尊身先生からオリエンテーションをしていただきました。種子島が日本の将来の医療のモデルとなるように尽力されていること、地元のアスリートも応援していること、種子島医療センターは離島にありながら最先端のCTを導入していること、リハビリに力を入れ、治すだけでなく生活に復帰出来るようにしていること等は深く印象に残っています。

また、田上寛容先生のスライドはとても感動しました。温かみのある医療を提供し続けているからこそ、患者さんも答えてくれるのだなあという外来見学の時にも感じました。

田上診療所では猿渡先生にもお世話になりました。実際に手で触れることで患者さんか安心し、びびるという話を覚えてます。どの先生方も、人を救いたい、そこにやりがいという熱い思いを感じました。飲み会にも連れていていただきたくさん楽しい話を聞きました。飯田さんをはじめ、各施設の方々にも本当によくいただきました。2週間という短い間でしたが、ありがとうございました。

7/17 9分

4月22日～26日、5月7日～9日の計2回、大変お世話になりました。

私と種子島に来るのは初めて、離島医療とはどのような患者さんが来るといふ所

診察や治療が行われているのか見当をつけておけません。種子島医療センター

では、病室24床に7人、9人、11人、13人の病室が約90床と大抵割合は、

が、県内外から個人、会社の9人、11人、13人が集まるといふことが知り、高齢の方が

多い地域で、平均的に合計医療を提供しているのではと、思いました。特に、離島医療

と、これだけの医療機関が、必要に、いかに、医療センターは最新のCT装置が

導入されている、病院内の設備面では、大学病院と（個人、会社）契約しているのと同じく、

印象として、医療センターや産科、内科、外科診療所では、特に9人、11人、

を、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、

それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、

それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、

それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、

それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、

それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、

それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、

それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、

今回の実習を通じて、私も、患者さんの病気を、しっかりと、患者さんの生活に、

それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、

それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、

それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、それぞれ、

6年 初科 奨励

今回、7/22-26, 5/7-9の期間 離島実習として 種子島医療センターや
産婦人科医院をはじめ様々な施設の方々に大変お世話になりました。
種子島は初めてだったので、離島での医療や地域医療が実際に
どのように行われているのかなど、より近い目標を学ぶことが
できました。

初めの高尾先生のお話で現在種子島医療センターには回復期リハビリ
病棟と地域包括ケア病棟あわせて90床あり80人はこのリハビリの方が
働いていて一人の患者につき二人ずつ働いているということを知り、今では
二次救急の場のチームの方が強いのではないかと、急性期を乗り越えたら自宅へ
帰るまでの橋渡しやその後のフォローを行う地域医療の場としても重要な役割
を担っていることがよくわかりました。

また、訪問看護や介護老人保健施設、デイサービスなどの見学や利用者
さんやその家族の方とお話を通じて、これらの施設の方々が大きな病院や地域の
診療所と連携して地域医療を支えているおかげで患者さんはもちろん患者さん
の家族も自分の住み慣れた地域で安心して過ごせることができていることとても
実感しました。

実習期間は全部で7日間、種子島の滞在も全部で10日間と短い期間では
あつたのですが、いろいろな医療、介護の現場を見学・体験させていただき、何日
の日には種子島のおいしいごはんやきれいな海、守留センターなどを満喫する
ことができ大変有意義な時間を過ごすことができました。今回実感したことを
志す前にこれから生かしていきたいと思っております。本当にありがとうございました。

<種子島 離島・地域実習を終えて>

鹿児島大学医学部 6年
東 拓郎

令和1年5月28日～6月7日、種子島医療センター、田上診療所、種子島産婦人科医院、介護老人保健施設わらび苑、特別養護老人ホーム現和苑、特別養護老人ホーム百合砂苑、グループホーム百合砂において実習させていたいただきました。どの施設にも行き、患者・利用者から人として尊重されてあり、医療・福祉・介護の大切さを体験できたのではないかと感じました。

○ 種子島医療センターでの実習

種子島医療センターでは、外来実習として循環器内科、整形外科、小児科と病棟実習として、地球包帯病棟、リハビリテーション病棟での実習をさせていたいただきました。また、訪問看護ステーション野の花での実習でも、看護師の島菜さんと帯同して、認知症の4名の患者さんの個人宅を訪問させていたいただきました。限られた時間の中で、バイタルチェック、同居の家族への対応、お金の支援などさまざまなことを学びました。

○ 種子島産婦人科での実習

種子島産婦人科では、午前中は外来見学で、午後はお産の見学をさせていたいただきました。外来では4名産婦健診の患者さんが多い、そこで、婦人科産科の患者さんにも何名かいる、しりあました。私も産科志望ですが、改めて産科の知識も必要だと感じました。午後のお産は産科というよりも入り込めずに行きました。助産師さんの役割がとても大きいと感じました。

○ 田上診療所での実習

田上診療所では、午前中は99号Dビルにて内科の外来で、午後には横渡Dビルにて皮膚科の外来を見学させていたいただきました。皮膚科は豊富な診療経験と人手経験に基づいて2-7分間の適切な診察をこなしていただき、私も経験が浅い、お二人の医師に頼りたいと感じました。

○ わらび苑、現和苑、百合砂苑、グループホーム百合砂での実習

わらび苑では、午前中はデイケアの利用者さんとお話をしたりしてコミュニケーションをとりました。午後には入所者の利用者の話を聞いていただきました。利用者の性格や社会的背景はさまざまあり、大変勉強になりました。グループホーム百合砂では、利用者さんの話を聞いていただきました。現和苑では苑のまりと利用者さんとお話をさせていたいただきました。とても喜んでいただけました。百合砂苑では利用者さんとの話からグループホームを学び、リハビリの体験も行う、お話をさせていたいただきました。グループホーム百合砂では認知症の利用者さんだと、お話をさせていたいただき、多少の割合がわかるようになりました。

今回の実習では、種子島の医療、福祉、介護までを体験することができ、またそれぞれの非常に高いレベルで行動していることがわかりました。私も近いうちに自分自身で働くことができることを目指すつもりです。ありがとうございました。

種子島での離島地域実習を終えて

鹿児島大学 116 徳田 真

種子島は親族が40年縁のある土地で、種子島における周産期医療から高齢者福祉までの医療の実態について多くを体験し、知ることができたと思います。実習に臨みました。

10泊11日という実習日程の中で種子島医療センターに来場見学、病棟実習、訪問看護など地域中核病院での実習、種子島産婦人科の周産期の実態、介護老人保健施設「わらび苑」、介護老人福祉施設「現和苑」、中種子町の田上診療所、障害者就業支援施設「猿蟹川」など非常に多くの施設で実習、見学をさせて頂いた。

医療・福祉の面から見ると、種子島医療センターを中心に周産期医療から、介護老人保健施設、介護老人福祉施設、障害者就業支援施設、在宅医療に至るまで、地域包括的な島内で完結するようシステム化されており、関連施設間からこの情報共有、連携を強化していることが伺えることができた。多くの患者さんや入所者の方々と会話やレクレーションを通してコミュニケーションを取ることができた。大多数の方が島外から、島の最後を迎えることを望んでいることが分かった。

多くの方は生れ育った土地の最後を望むと思うが、島で暮らす方がいると思うことが特に感じ、その方の思いに合ったための環境が整っていて感謝した。

医療従事者だけでなく、多くの患者さん、地域の方々とお話しさせて頂いて感じたことは、

「人柄がとにかく温かい」ということです。積極的に話して下さり、医療にこの地域のこと、患者さんご自身の生活状況、困っていることなど、多くのことを教えて下さり、大変助かりました。

地域医療は、その地域に求められていることが異なる、ということも考えているが、その地域の需要に応えることができていて、一つの地域医療の完成を見ることになったと思います。

今後、どのような形になるかは分かりませんが是非種子島の医療に関わりたいなと思います。短い間でしたが、大変お世話になりました。ありがとうございました。

感想文

鹿児島大学6年 戸田 朝有沙

この2週間で、高度医療を担う医療センターから、診療所や訪問看護、介護福祉施設やグループホームまで、様々な医療福祉施設を見学させていただきました。島での医療は基本的に市内で行われていることと変わらず、リハビリに関しては種子島の方が手厚く、きめ細やかに行われている印象でした。医療センターのPT、OTの人数が医師、看護師よりも多いことにとっても驚きました。反対に医師の人数は少ないので、先生方の負担はかなりの大きいかと思えます。研修医的には、医師の人数が少ない分、色々な症例を担当医として経験できる点が良いと感じました。

様々な施設を巡り、思ったことは、私達の中で、病院=仕事+生活の場であるが、患者にとって病院=生活の場ではないと改めて気づきました。あくまでも病院は仮りの住まいであり、患者が家(施設)に帰ることを目標にOT、PT、ST、ソーシャルワーカーと協力し、治療計画を立てることの重要性を実感しました。

患者の退院後の生活が思い描くことを忘れない医師を目指したいと思っております。

2週間弱の期間でしたが、種子島の美しい自然に触れ、おいしいごはんを食べました。親切でやさしい島の人々とも触れ合い、種子島を想像以上に満喫しました。今回の離島実習で、種子島は思い出深い地となり、研修か、旅行で、是非また種子島に来たいと思っております。

最後になりましたが、今回の実習でお世話になりました、田上先生、飯田事務長をはじめとする皆様にお礼申し上げます。ありがとうございました。

2022年6月20日(木)

種子島 実習 - 感想文

鹿児島大学6年 小川樹里

初めての種子島だったのでとても楽しみにしていました。

種子島医療センターは種子島の中で一番大きい病院で、外来には多くの患者さんが受診されていました。医師数が少ない状況で、大勢の患者さんを診るのでとても忙しそうだったという印象でした。

種子島医療センターには地域包括ケア病棟という急性期治療を受けられた患者で、引き続き継続治療やリハビリテーション、退院前準備をする患者さんが多く入院していました。

地域包括ケア病棟のスタッフさんは看護師さんよりも理学療法士、作業療法士さんの方が人数が多いように感じました。看護師さんに着いて採血や抗菌薬静注投与など多くのことを経験させていただき、とても勉強になりました。

回復期リハビリテーション病棟では、脳血管疾患や褥瘡椎体骨折などの

手術後、集中的にリハビリ訓練を行っていました。午前中に患者さんのバイタル測定、それ以外に血糖値測定や点眼、

の注射など様々な手技をしました。大学病院ではできない経験をさせてもらい楽しかったです。

介護老人保健施設や介護老人福祉施設では、必ずラジオ体操を行ったので、久しぶりに体操して体を動かしました。施設にいた高齢者の方々はデイサービスやショートステイなど様々でした。

なかなか高齢者の方とコミュニケーションをとる機会がなかったので、新鮮でした。

実習も観光も含めて2週間あという間でした。種子島医療センターの理事長先生、猿渡先生、事務長さんありがとうございました。

種子島の実習を終えて

4-Aクラス

植村 義直

まず初めに2週間面倒を見てくださり、本当にありがとうございました。初めの種子島の色んなお土産、お話をいただき、2週間存分に種子島の人の温かさに触れられました。過ごすことができました。

今回初めて種子島に来るとは、高速船に乗って1時間半で着き、意外と近いことに驚きました。到着すると、事務の飯田さんに歓迎され、病院(種子島医療センター)案内されました。病院は研修医、発表のあふに、多くの先生や看護師が集まっていた。予想以上に賑やかでした。その夜西表市の街並みも見つ、近くの商店で買物もしてみました。街並みは思っていた以上に田舎の感じでした。種子島は上陸3日前には、人口が万人と聞いて、それ以上にスーパーやコンビニはたくさんあるのと同じです。実際はどちらか数えきれないほど、商店街やコンビニも、飲食店も並ぶ通り、2、3本ある程度でした。それに宿舎へ行き、その周りを練歩くと、建物にはほとんど見当がなかった。正確に宿舎に着いた時は「こんな所で2週間過ごすのってすごいのかな」と不安を感じました。2日目以降は実習が開始し、種子島医療センターには、わがびら訪問看護、種子島産婦人科医院、田上診療所と色んな施設や訪問看護を見学しました。実習の初めには高尾養院長とお話の機会があり、「種子島は半島にこんな島は、100%に実習できることに幸運なことだ」という言葉を頂きました。それぞれの施設で訪ねる患者さんや、働いている方は親切で、話しかけるととても笑顔で答えてくれる様子に私はとても元気をもらい、本当に養育士としての成長を感じることができました。休みの日には、田上理事長や、飯田さん、田上診療所の事務の古元さんに食事に行きつづけてもらいました。それぞれの宿で種子島の特産品を頂くことができました。夕方や水曜、木曜の日は(2日間)の夜は2泊おはぐり満ちました。食事以外は、南種子町へ行き、口外センターや千原の岩屋へ行きました。口外センターは若い人が多く、自由に見てもらえることができました。1週間、実際に口外センターの打合せの距離を見ておいて強く思いました。

病院や診療所、介護保健施設での実習はそれぞれ学ぶことが多く、地域の医療をどうやって支えているのか、深く知ることもできました。これから先、都会へ人が流れる傾向の(20、)地域の医療を支えるのはとても難しいはず、ぜひ高齢化が進んでいくと若年層が、私たちが若者からどうやって支えるのか、感じ上げてみるか、考えたいと思います。これも難しい課題ですが、今回の実習でこのことは気付かされたので、自分の力としたいと思います。医師にはぜひ地域の医療を少しでも支えたいと思います。

最後にはりて、2週間有意義な時間を種子島で過ごしました。また種子島は遊びや研修等が楽しかったと思います。本当にありがとうございました。

種子島での実習を終えて

4-A コース

鹿児島大学医学部医学科6年

4214100323 越益 諒

私は6/24～7/4の期間で種子島実習をおこないました。今までいわゆる“離島”には行かず、たまたま行ったため、はじまる前からとても楽しみにしていました。まず初日から振り返っていいと思います。種子島に到着して感じたことは、まずあまり鹿児島市内と差はないということです。離島とはいっても西表市はスーパーや酒屋も充実しており生活していく上での不自由はない様子でした。2日目には、病院長のオリエンテーションがあり、種子島の紹介や種子島医療センターのしている活動、趣味についてなど様々なお話を聞かせていただきました。午後は訪問看護に帯同しました。その際に、「もともと訪問する頻度をあげたい患者さんもあるが、介護保険の限度額の問題でいけないよ」といった苦悩も聞くことができました。高齢者の多い離島、地域では特にこういう問題が多く、解決するためにどうすればいいかを考えなくてはならないと思います。3日目にはわらび死での実習がありました。認知機能が低下している方やあまり自分から話しかけない方も多く、どういう風に接していいかわからない場面も多々ありましたが、自分から話しかけていこうと相手の方も少しずつ心を開いてくれたのがスムーズにコミュニケーションをとれるようになりました。まずは、積極的な姿勢が大切だと感じました。4日目には種子島産婦人科医院にて実習をおこないました。はじめに外来を見学させていただき、その後、沐浴の見学や、病院の紹介をしていただきました。沐浴を見学するのは初めてだったので、泣いたり、驚いたり、笑ったりと色々な反応をする赤ちゃんと微笑ましく見守る両親や、初めて沐浴させるお父さんの慌てている様子を見て、とてつもない新鮮さを感じました。5日目には種子島医療センターで外来診療見学をしました。待ち合所にいる患者さんの血圧を測り、採血を伺うことができて、特にどの患者さんも快く血圧測らせていただいたりとやうな暖かい対応をしてくださったことが印象的でした。土日は写真センターで訪ねて、事務の百石さんとテニスをして充実した休日をすごしました。7月1日は現知死、百合砂死にて実習をしました。わらび死での経験のおかげで、入所者、通所者の方に様々なお話を聞くことができました。中には、家族に何も聞かずに入所することになった方もいらして、他にも多くの人が家族と離れて介護施設に入ることとよくは思っていないようでした。しかし、家族の事情や介護人がいないため入所するしかないというジレンマを抱えて、高齢者社会の日本が直面している難しい問題だと感じます。その翌日は田上診療所での実習でした。設備は超音波やレントゲンなど最新設備でしたが、多くの方が先生を頼り、お礼を言っていました。看護先生が「患者さんの不安をなくすこと、納得してもらうことが一番大事だ」とおっしゃっており、こういう現場での医療では知識よりも大切なものがあると感じました。最後の2日間は種子島医療センターで実習をおこないました。看護部主任の月について知り、仕事の内容や患者へのコミュニケーションのやり方を学ぶことができました。この2週間を通して、離島医療の実情を知ることもできました。離島ということでは医療資源が少ないのが現実ではありますが、出会った先生やスタッフの方々が皆さんエールをくださるおかげで印象的でした。自分も将来、鹿児島地域医療の発展に少しでも貢献できることを目指します。最後にわらび死の2週間が世話になりました。飯田さんをはじめ、高尾院長や田上理事長、看護副院長、百石さん、その他関係者の方々にも大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

種子島 離島実習を振り返って

鹿児島大学医学部医学科6年 井上 彩

種子島について事前にとらえていた印象は、南北に細長い、敵砲伝来の島である、という伝説やイメージとしたイメージであった。

船で柳井と聞いて、以前と輪島に旅行した時に約20時間の船旅をしたことを思い出し、一瞬胃が呆然したが、トビで90分程と聞いて内心かなりホッとした。地図で見ても明らかだが、他の離島に比べてとても近いことを体感しながら、種子島に初上陸した。実習では訪問看護、病棟実習、福祉施設の見学、外来見学などを行った。

訪問看護では半日で2人の患者さんのとこまで向かった。鹿児島市内での往診実習では半日で10件以上回っていたことを思い出し、相違点を探しながら実習に臨んだ。種子島の訪問看護では一人一人にかける時間を余裕を持ってとっており、患者さんの話をじっくり聞くことができた。また、西大表から中種子まで行くこともあり、片道30~40分かけて移動した。家が本庁場所が軽自動車か1台ギリギリ通るくらいだけの道を通る必要があるところが多く、運転が大変そうだなと思った。しかし、公共交通機関が少ないため、自家用車がない人、免許を返納した高齢者は生活し辛いだろうと思った。例えば、南種子から医療センターまで1回で90分、1700円ほど片道ばかり、時間や金銭の負担が大きい。外来では遠方の人ほど長い期間の薬の処方とし、何度も通わずに済むような配慮を感じた。また、速く病院にかかるとても早いように病気を予防することがいかに大切かを知った。医療センターの外来見学では、待合に大部の患者さんが待っており、先生方も限られた時間の中で一人一人の診療を丁寧に行っていた。短い時間だとしても、患者さんとの対話を大切にするこは、信頼関係を築き、治療を進めていく上で必要不可欠だと思えた。

種子島10日間の滞在で、種子島の医療や文化、自然を学び、満喫することができました。種子島は人が温かく、美味しい食べ物、美しい自然があることを体感し、印象がガラリと変わりました。充実した毎日が過ぎたのも、実習に関わっていた方が全この方のおかげだと思えます。本当にありがとうございました。

2019. 7. 18

種子島実習を終えて

鹿児島大学医学部医学科6年 増田景子

7/8に大学でオリエンテーションを院付にて受、種子島へやってきました。"高速船は?" (時間半と、思ったより) すぐに西之表港に着きました。説明を院付でわくわくしながら宿舎へ向かいました。宿舎の道は、普段あり見ることのない畑の道で新鮮でした。まず訪問看護の實習があり、島の人と交流をできると同時に、高齢化などの問題を感じました。施設に入らず、ショートステイと家を(週間予約で行き来している方の多さ)におどりました。質問もまともにない家や、ヘルパーさんの出入りしかかまわなかったおぢいちゃんなど、どうにかどうかかかと考えさせられました。午後は戸長先生、理事長先生のオリエンテーションがありました。種子島のこと、医療の現状を学ぶことができて、2日目、わらびでんでは入所者やテニサーゼスの方と一緒にレクリエーション? "楽しかったです、リハビリを見学したり、会話をしたりしました。午後は訪問看護の實習で、島の人とよくふれあえる2日間でした。3日目の産婦人科医院では、島の女性と交える先生の仕事を真近で見ることができました。今まで大学では学べなかった、プライマリケアを学ぶことができたと思います。入所者と床ほどあり、先生は大変だなと思いました。4日目は、地域包括ケア枋本東実習でした。大学では経験できなかった枋本東だったので、とても勉強になりました。看護師が具体的にどのような働きをしているのかも知ることができ、大かになりました。週末は、島内を観光し、島の人と交流したことで、島の人と交流することができました。島の自然や文化を体験し、また支援についても、多くの人にも出会えて3日間でした。

2週目は田上診療所での實習から始まりました。先生方が交代で4名の先生と交わっているのが印象的でした。障がい者就労の施設では施設見学と説明があり、今まで全く知らなかったのととても勉強になりました。外来見学では、循環器科、内科、一般内科、整形外科、小児科、皮膚科の見学をしました。患者さんの予約におどろきました。また、ムカデやマシなど、地域特有の病患も見ることができていました。鹿児島医療では専門性よりも総合力、人間性が大事だということを感じました。

2週間を通じて、種子島で生活すること、仕事をすること、病院にどう関わることが必要なのか? 子どもが生まれる? と、平常とはと身近に感じることができました。また、實習でお世話になった高尾院長、田上理事長をはじめ多くの先生方、スタッフの皆様には深く感謝しております。また、懇話会をきっかけに種子島に来たいと思います。そのためには立派な医師と入れたいです。よろしくお願いします。2週間、ありがとうございました。

拝啓 春暖の候、益々々々健勝のことと申度お申上げます。

この度は、お忙しい中、病院実習の機会を頂戴しまして誠にありがたうございました。

訪問診療、外来診療、病棟実習など多岐に亘り参加させて頂き、沢山の貴重な体験をすることができました。

種子島での医療機関の運営で、地域医療の現場について学ぶことへ大変、これから鹿児島県の医療に携わる身として何かお力になれたいと、学ばなければならぬのと考えていることか

りました。種子島医療センターには、離島医療の要諦を学ぶという高尾先生の御指導、御家庭に感謝いたします。それと同時に、地域に

実習し、患者さんへ信頼を得る診療を行うという先生方から学び、自分も先生方のように信頼される医師になりたいと強く思いました。

種子島の方々に皆々お礼申し上げます。先生方、有難御座り方々、施設の方々、患者さんにはお礼を毎日感謝の気持ちでいっしょにです。

今日の実習で得た経験を活かし、今後より一層学業に励みたいと思っております。

とり急ぎ書面をも、御礼申し上げます。

敬具

平成三十一年四月十一日

鹿児島大学 医学部 医学科 川佐 有輝

種子島 医療センター 病院長

高尾 喜寿 先生

種子島 医療センター 事務課

拝啓

時下、ますますの清栄のこととお慶び申し上げます。

六月二十四日から七月四日まで、貴院の実習にいたしました鹿児島大学 医学部 六年の榊林 義直と申します。この間は、十一日間にわたり大変貴重な実習をさせて頂いたことにつきまして、あらためてお礼申し上げます。

理事長の田上先生や高尾先生、また事務の飯田様をはじめ、たくさんのお方々にお時間を割いて頂き、本当に大変お世話になりました。

種子島の医療をいろいろと学びたいという思いを病院からお聞きいただき、施設や診療科にそれぞれお話を伺わせて頂きました。種子島の方は明るく、施設は方々多く、非常に印象が良くなりました。種子島は島民の印象も良かったです。業々、有難義は時間を過すことが出来ました。

とり急ぎ書面をもち、お礼申し上げます。

敬具

令和元年七月十二日

鹿児島大学 医学部 六年 榊林 義直

拝啓 この度はご多忙中にもかかわらず、実習(1)水曜日(2)誠心研がごさいました。特に年輩の飯田さん、種子島医療センターの上先生や高尾先生、飯田先生には大変お世話になりました。今日の実習で先生方から学ばせていただいたことは、心に残る貴重な経験となりました。時局の中でのご指導、御礼申し上げます。

敬具

部門別紹介

診療部

外科
内科・総合診療科
循環器内科
消化器内科
眼科
整形外科
小児科
麻酔科
泌尿器科
肝臓外来科
脳神経内科
糖尿病内科
血液内科
ペインクリニック科

看護部

看護部
外来
手術室・中央材料室
2階病棟
(外科・脳外・整形病棟)
3階西病棟
(内科・眼科・小児科病棟)
3階東病棟
(地域包括ケア病棟)
4階病棟
(回復期リハビリテーション病棟)
透析室
クラーク室

診療支援部

薬剤室
中央画像診断室
中央検査室
臨床工学室
栄養管理室
リハビリテーション室
地域医療連携室

事務部

総務課
医事課

直轄部門

DMAT
医療安全管理室
システム管理室

